The Japan Society of Educational Sociology

バーンスティンのコード理論：階級と言語的不平等

大阪大学大学院　高田一宏

1　はじめに

教育達成の階級差を説明する説のひとつに、学校と階級下位文化の文化的不連続を指摘する説がある。この発表で報告する、バジール・バーンスティンの社会言語コードの理論は、コミュニケーション様式の面から、そうした文化的不連続を論じた代表例である。

文化的不連続説にかんしては、労働者階級の下位文化を文化的に剥奪された状態にあるとみなす（文化的空白、「貧困の文化」）論者と、文化相対主義的な観点から下位文化をとらえようとする論者の間の論争がくりかえされてきた。この種の論争の中で、社会言語コード理論は、バーンスティン自身の再三の反論にもかかわらず、文化欠陥仮説にきわめて近いと評価されることが多い。

この発表では、社会言語コード理論が形成された過程と、彼自身の反論をあとづけることによって、ことばと教育達成の不平等の関係について検討する。

2　社会言語コード理論の生成

バーンスティンの研究の出発点には、二重の問題意識が存在していた。第一に、労働者階級の教育達成が低位であるという現実をどのように説明するかということ、第二に、「象徴の秩序（symbolic order）、社会関係、経験の構造化のあいだの関係（Bernstein, 1974, p.171.）」がどのように生じ、変化するかということである。社会言語コードの理論は、こうした問題意識を背景に形成されている。

a 象徴と経験の構造化の関係について

この関係をとらえるさいに彼が依拠したのは、「サピア・ウォーフの仮説」とよばれる説である。この仮説によると、「個々の言語の背景的な言語体系（つまり、その文法）は、単に考えを表明するためだけの再生の手段ではなくて、それ自身、考えを形成するものであり、個人の知的活動、すなわち、自分の得た印象を分析したり、自分の蓄えた知識を総合したりするための指針であり、手引きである……」。この仮説は、思考がランゲージ体系に依存することを仮定している。

b 象徴と社会関係の関係について

上の仮説は、ことなるランゲージの体系の比較研究から導かれたものである。バーンスティンは、ことばが交わされるコンテクストの社会関係がスピーチの形式を規定し、さらに、その形式が、話者の経験の構造化を方向づけると考えた。彼は、サピア・ウォーフの仮説と同様の主張を、ランゲージのではなくスピーチのレベルでおこなった。

社会関係の特徴は、話し手と聞き手の間の親密さの度合い、共有意識の度合いから考察されている。この度合いが大きいほど、コミュニーションは共有された暗黙の知識に依存し、スピーチの上で意味を明示することが少なくなる。いいかえると、非言語的なコミュケーション手段の比重が高まり、言語的手段の使用は抑制される。いわゆる限定コードは、このようなコミュニケーションの場面のスピーチの表出を規制する原理である。こうした社会関係は、親しい友人、家族の間などにみられることから、バーンスティンは、限定コードに規制された発話は、階級をとわずあらわれるはずだと考えた。

逆に、この度合いが小さいと、言語的手段と非言語的手段の比重は逆転し、スピーチは、伝達内容を明示的にしめすようになる。このようなコミュニケーションの場においてスピーチの表出を規制するのが精密コードである。このとき、スピーチには、特定のコンテクストにしばられない普遍的意味が現れる。

c 社会構造とスピーチ

最終的に、バーンスティンは、個々のコミュニケーションがおこなわれる社会的コンテクストをより大きな社会構造に関連づけた。すなわち、統合が機械的連帯にもとづくような社会構造のもとでは、成員の同質性が強いために、コミュニケーションも暗黙の知識にのっとっておこわれやすく、このような社会では限定コードに規制されたスピーチが現れやすいとした。一方、統合が有機的連帯にもとづくような社会では、精密コードに規制されたスピーチが現れやすいとした。

以上の議論を整理すると、バーンスティンのいう「象徴秩序、社会関係、経験の構造化の関係」は、次のようにしめせる。

ランゲージの体系→スピーチの形式・意味→経験の構造化

↑規制

社会統合の形式→コンテクストにおける社会関係

3　剥奪論と社会言語コード理論

コードは、「社会関係の関数（Bernstein, 1974, p.77.）」であり、スピーチの形式を規制する。コードは、同時に、スピーチに

NII-Electronic Library Servi

The Japan Society of Educational Sociology

現れる意味を規制している。スピーチのうえで意味を明示する形式のコミュニケーション、いいかえると非言語的要素にたよらずにおこなうコミュニケーションを家庭で学習する機会においては、階級差が存在すると考えられている。そして、彼は、この型のコミュニケーションは学校で支配的な型だと主張している。その結果、学校との関係において、労働者階級の子どもは不利な立場におかれているとされる。

この議論を剥奪論的だと批判されたバーンスティンは、二つのやり方で反論を試みている。第一に、限定コードに規制されたスピーチには独自の価値があるという反論である。だが、この反論では、労働者階級の子どもが学校のコミュニケーションに適応しにくいという事実は不問にふされる。第二に、「コードは、コンピテンスではなくパフォーマンスーーこれらの用語のチョムスキー的な意味においてーーと関連する（Bernstein,1974,p.146.）」、「コード概念はすべての人が共有する（言語的・認知的）コンピテンスを前提とする（Bernstein,1990,p.113.）」といった反論である。

バーンスティンは、コンピテンスとパフォーマンスを厳密に分けている。その上で、コンピテンスに階級差はないとする。「コードが限定的だからといって、子どもが言語を持たないとか技術的な意味で言語的に剥奪されているという意味ではない。なぜなら、彼は他の子どもと同様、言語規則の体系についての暗黙の理解を持っているからだ（Bernstein,1974,p.146.）」。チョムスキーの使う意味でのコンピテンスは、「理想的な話し手」の文法的文を作り、理解する能力である。パフォーマンスは、その知識が実際に運用されることである。

ところが、コンピテンスとパフォーマンスにかんしては次のような議論もある。「子どもは文法体系を獲得する社会的基盤の中で、人、場所、目的、その他のコミュニケーション様式に関して、その使用の体系をも獲得するのである。……つまり、伝達事象の全ての要素を、それらに関する態度や意見と共に獲得するのである。……そのようなものを獲得するということが、子供の社会言語能力（あるいはもっとひろく伝達能力）なのであり、それはその社会に単に話すことができる成員としてではなく、コミュニケーションができる成員として参加する能力なのである（ハイムズ,1979,p.107.）」。

コンピテンスの概念は、「知識に限定されているのであり、知識の中でも文法の知識に限定されているのである。したがって、それは話し手のその他の暗黙の知識と能力を、ほとんど検討されていない「言語運用」〔＝「パフォーマンス」〕という概念の下に一緒くたにし、混乱したままに放置しているのである（ハイムズ,1979,p.125.）」。

バーンスティンは、コンピテンスを、全ての人が暗黙のうちに「知っている」文法的知識として考えているようである。彼において、コンピテンスは社会的学習の結果ではない。生得的なものである。このような「コンピテンスにおける平等」の主張は、コンピテンスの遺伝説を否定するものでしかない。実際には、ハイムズのいう伝達能力において階級差が存在している。それは、a学校で使われる語彙やいいわましを知らないこと、bそれらを知っていても使用の動機づけがされないことなどにその原因がある。

4　まとめ

バーンスティンのいう意味でコンピテンスに階級差がないとしても、ハイムズのいう意味においては、伝達能力には階級差が存在する。さらに、スピーチの形式と意味が話し手の思考を左右するというバーンスティンの前提からすれば、伝達能力の差は、認知面の欠陥を意味するはずである。しかし、彼は、言語剥奪論への反論を意識するあまり、コードはパフォーマンスのレベルにのみ関連すると主張した。この反論は、社会言語コード理論にたいする批判に正面から答えるものではない。伝達能力という意味の能力において、階級差が存在する可能性は検討されないからである。

学校以外のコンテクストにおいては、中産階級と労働者階級の立場は逆転するかもしれない。伝達能力は、コンピテンスの概念のごとく普遍的ではなく、個々のコンテクストに特有なものだからである。このような見地に立てば、精密コードは、バーンスティンが示唆するようにあらゆるコミュニケーション様式への適応能力ではなく、学校教育の限られた領域への適応能力をもたらすと考えられる。そして、学校にもとめられることは、欠陥という観点からではなしに、生徒が学校外で学習する多様な伝達能力を正当に評価すること、さらに、学校で必要とされる伝達能力を欠いている者にたいして、その伝達能力を習得させる方法を探求することだと考えられる。

・B.Bernstein,1974,Class,Codes and Control vol.1, second edition,Routledge and Kagen Paul.
・B.Bernstein,1990,Class,Codes and Control vol.4, Routledge and Kagen Paul.
・デル・ハイムズ著、唐須教光訳『ことばの民族誌』、紀伊國屋書店、1979年。

NII-Electronic Library Service